

## 好きな色

松井 とし



嫌いな色は厳然とあるのだが、好きな色を特定することは難しい。色の美しさは、組合せによって生み出されるものであろう。

ひとくちに赤といっても、朱に近いものからピンクに近い赤まで、何種類もの色が存在する。それぞれの微妙な色合いが、さらに他の色との組合せによって動き出す。それ故、色にはこだわりを持っている。

しかし、子どもたちをとりまく色は、みな調和を欠いた原色である。ブロック、砂場遊びのジョーロ、スコップ、ままごとの器。プラスチック文明がもたらした、一種独特な色である。

大人社会が作り出し、無防備な子どもに与えるものは、質を問題にしていけないように思

われる。『子どもだまし』等という言葉が存在する社会である。

幼稚園という、子どもが生活する場の環境を作り出している色は、そこで行われている教育の質を表していると言ったら言いすぎであらうか。

たとえば、ガラス一面に毒々しいピンクの桜の花が一年中貼ってある幼稚園。色の調和など考えもしないで、折り紙で作られた飾りものが壁面をいっぱいにしてある保育室。そういう場に一步足を踏み入れると、いろいろな色が眼にとびこんできて、私は息がつまりそうになる。

ある時こんなことがあった。つねづね、教材屋さんの絵の具のひどぎに辟易としている私は、画材屋で舶来の水彩絵の具をたくさん買って来た。水の中で次々生まれ出る美しい色に、子どもたちは感嘆の声をあげた。そして、同じ黄色にもいろいろな色があることに興味を示した。コンテで描いた上に筆を置くと澄んだ色たちがマッチして、私たちはみな、落ちついた幸せな気分になった。

私は、子どもたちにもいつも本物を見せ、聴かせ、そして与えたいと願っている。勿論、その先で何を選ぶかは、その子どもに任せられるべきであるが……。みずみずしい感性を持つ子どもたちにとって、出会いは『一期一会』の重みを持つ。

(元神奈川県立横浜幼稚園)